

15.地域を知ってどんなこと、得することは？

自分が暮らしているところを周囲を含めて、山が迫っているか、川があったら上、中、下流域のどのあたりなのか、道路はどんなところを走っているか、全体的に高台なのか、坂が多いのかなどを眺めてみてください。普段は何気なく住んでいるところも、注意してみると近くに遠くに様々なものが見えてきます。そして、自然地形に近いところか、あるいは人工的に開発されたところなのか、住宅地になる前はどんなところだったのか、古くからの街並みだったのか、神社や寺があるのであれば、古くから住んでいる人もいるはずで、地域の歴史を詳しく教えてくれるかもしれません。

そして、旧地形を見たり知ることで、かつての土地利用が読めてきます。先人は経験から巧みに土地の性質や周りの状況を判断して、集落と水田、畑と区分利用して、災害から守ろうとしていたこともわかります。例えば、わずかに高いところの自然堤防に集落を築いて、周りの低平地を水田としているとか、沢の出口は平坦地がありながら、集落はやや高台のところに神社と一緒に暮らしているというようなことがわかります。そのようなことから、いかに自然災害を避けるように生活環境を選択しているかがわかります。

その後、住宅地が発達して開発されても旧地形の特性は潜在化していることになります。沼や湿地といったところは盛土をして宅地になっても、基礎地盤は軟弱地盤であったり、集水する所の可能性があります。そうすると道路の沈下や地震時に建築物の不具合などが発生する可能性もあるかもしれません。また、土石流の堆積物でできた緩傾斜地の広い地域は宅地として好ましいと判断され開発して広大な住宅地になっている個所もあります。このような場所も背後の地形を把握して、地形の形成因を知って過去と同様なことが起きる要因がないかなどを理解しておく必要があります。住宅地ができた後でもリスクを知って様々な対応をしておくことは大切なことになります。実際に、9年前の広島土砂災害や、施設が沢の出口にあったために土石流で多くの住民が犠牲になったところもあります。

まずは、手元のハザードマップを見て、様々な近くの情報を確認してほしいと思います。それは地形や、災害履歴、危険箇所や指定箇所といった注意すべきところはどこかどんなことが起きそうなのか、つまり地域の災害リスクを知っておくことで、日常から地域を見る目が変わります。そうすることで、避難ルートや避難の方法などを計画することができるし、危険箇所を地域で共有しておくことにもつながってきます。このように地域に関心を持って地域知を知ることは、災害時に想定外をできるだけ小さくすることができることにもつながります。

しかし、知識だけを積んでおけばよいというのではなく、関心を地域における情報共有に結びつけることも大事で、コミュニティの復活の兆しにも役立つかもしれません。また、自分の地域で得たことは、外出した時などにも地域情報を基にして応用を利かせることにもなります。